だ。貞山堀開削もその一つで、「貞山堀」の命名者でもある。同19年愛媛県書記官に栄転辞令が下ったが、辞任して仙台にとどまり、早川組を創立した。彼は事業家としての手腕も抜群で、東北・北海道の大土木工事で早川組の参加しないものはなかったという。明治36年2月第4代の仙台市長に挙げられ、40年7月まで在職した。日露戦争の前後にわたる多難な市政を美事に処理し、大いに市勢を振興し、名市長の一人に数えられる。大正7年〔1918〕1月22日、75才で病歿するまで、きわめて多方面な社会・公共事業に寄与貢献した。新寺小路松音寺に葬る。

注(7) 名建築家。新潟県西蒲原郡角浜村の人。明治5年オーストラリア万国博覧会に大工棟梁として出張を命ぜられ、日本家屋を建築展示して外人の喝采を博した。この時彼は、外国建築を見学研究し、洋式建築の技術を修得して帰国した。明治15年、荒巻三居沢に紡績会社新設の際、建築工事の監督として来仙し、後宮城県庁に招かれ、建築主任技手として40年間在職した。明治の名建築として県指定の重要文化財となっている登米小学校校舎を始め、本県の大建築物は殆どその手に成ったものである。大正13年3月16日歿、81才、東十番丁天神下栄明寺に葬る。

「明治の建て物」（河北新報クリッピング、昭和38年）の登米小学校校舎の記事中に、山添進一郎とあるのは、山添喜三郎の誤りである。

資料 昭忠会書類

昭忠会雑書

仙台市史（明治41年刊）

明治の洋風建築－宮城県（小倉　強）

仙台の文化財続編（仙台市教育委員会、〔昭忠碑の項はこの回答に基いて記された。〕）

44. ロシア捕虜収容に関する資料

問 私は、昨夏C社から「M収容所」と題する著書を出版いたしました。現在もひきつづき捕虜収容をテーマとして執筆中です。つきましては、日露戦争当時、御地に収容されたロシア捕虜について資料を御教示くださるようご依頼申しあげます。なお、今次大戦の連合軍捕虜についても資料がありましたら、併せてお願いいたします。

答 仙台市には、明治38年3月1日以降数回にわたって、松山収容所から2千余名のロシア軍捕虜が送られてきました。時の仙台市長早川智寛は、「捕虜に対しては人道的態度で接すべきこと」を、

各区長宛の通牒と、全市民に対する諭告を発してその徹底を期しております。捕虜のうち、満洲軍将校は環翠亭（常盤丁）・望城館（北三番丁）に、樺太軍将校は五柳園（本櫓丁）に、海軍将校は土木監督署跡・北川亭（北四番丁）・五城館（東三番丁）に、陸軍下士兵は宮城野原新築収容所に、それぞれ分散収容しました。このようにして、やがて11月27日及び12月16、17日に全員が仙台を離れて帰国の途につきました。この9か月間、市民の接遇と当局の措置よろしきを得たため、きわめて平穏かつ友好的に終始し、全国の収容所中、最良の成績を収めたといわれます。「宮城県史」第12巻に『日露戦役のロシア軍の捕虜は、中将以下将校千四百三十八人、兵卒七万五百二十五人であった。このうち約二千余人が仙台市に収容された。将校は自由外出を許され、片平丁旧制第二高等学校テニスコート〔現東北大学構内〕にきて学生を相手にラケットをふりまわすなど、政府も温く待遇した。……』と記しています。仙台出発にあたっては、官民が心をこめて駅頭に見送る等の配慮を尽したので、リヤプノフ中将は捕虜団を代表して、留守第二師団長山内中将宛感謝の書簡を送ってきた程でした。収容中1名の病死者があったが、市内陸軍墓地〔現在の常盤台霊園〕に丁重に葬り、いまだに香華も絶えず墓碑[(1)]も現存しています。以上がロシア捕虜収容の概略です。資料には次のものがあります。

1. 宮城県史第7，12巻
2. 仙台市史（明治41年刊）
3. 秒時計（半沢正二郎）
4. 宮城百年（毎日新聞社）

なお、第2次大戦時の捕虜は仙台市に入っておりません。

注(1)　墓表に「露国陸軍列兵ショーマリプキン之墓、明治三十八年六月四日病死」と刻んである。

45. せんだいはぎとみやぎのはぎとの違い

問　「仙台市史続編」第2巻の815ページに『宮城野には無数の萩が植えられ、仙台萩の名所として自然がそのままに残されて、奥床しく観光に一役買っている。』[(1)]とありますが、せんだいはぎとみやぎのはぎとは同じものですか。

答　仙台地方ではぎという場合みやぎのはぎのことを指していいます。これを、殊更に、或いは不用意にせんだいはぎといえば、全然別な植物になりますので注意を要します。両者の大きな違いは、「せんだいはぎ」は春に黄色の花を開き東北以北の海岸に自生するまめ科せんだいはぎ属の多年生